

# 資料読解力・文章表現力審査 (2023)

## (受験上の注意)

- 1 問題は15ページあります。
- 2 試験時間は90分です。途中退出は認めません。
- 3 解答開始の合図の後、まず受験番号・氏名・フリガナを、受験票を見ながら、解答用紙の所定欄に正確に記入してください。
- 4 解答は必ず解答用紙の所定欄に横書きで記入してください。欄外に記入のある解答は無効です。
- 5 答案作成には、HB程度の濃さの黒であれば、鉛筆、シャープペンシルのいずれを用いてもかまいません。
- 6 問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってください。

以下の問題1と問題2に解答しなさい。解答用紙の所定欄に解答すること。

問題1 次の文章を読んで、後の問1～10に答えなさい。なお、右肩に\*印を付した語については、文章の後にある（注）を参照してよい。

いったい時間とは何なのか。この問いにはしかし、少し用心しておいた方がいいだろう。「時間とは何か」とは、たんにある出来事について、それが「いつ起こったのか」、「どのくらいかかったのか」と尋ねることではない。それはそうだろう。「時間とは何か」という問いに、「3時だ」とか「2時間だ」とか答えても答えにならないことはすぐわかる。それではしかし、その問いはいったい何を問うているのだろうか。

〔中略〕

時間なるものを、出来事や行為の「いつ」や「どれだけ」と切り離して問うことは、たとえ思考の上では可能であったにしても、いたずらに問いを錯綜<sup>さくそう</sup>させ、無用の混乱を生むばかりではないだろうか。時間は実在するのかどうかとか、流れるのか流れないのかといった問いは、ややもすると深遠<sup>さくそう</sup>そうな問いに聞こえるかもしれないが、そのじつ、その奥行きは見せかけだけなのかもしれない。問いが落とす影の長さを、問いの深さと勘違いしているだけなのかもしれない。

こう自問してみてもいいだろう。A「時間とは何か」と問うとき、私たちは何だかよくわからないが、とにかく一義的に答えられるべき何か一つの「時間なるもの」があると考えてしまっていないだろうか。それはもしかしたら①ソボクな思い込みにすぎず、ほんとうは、身の回りで起こる多様な出来事を私たちが捉<sup>とら</sup>えるときにいくつかの捉え方が一括りにされて時間と呼ばれているにすぎないのではないか。B要するに、「時間とは何か」という大仰に振りかぶった問い方が、かえって事柄を見えにくくさせているのではないか。〈1〉、名詞化された事柄をただちに実体化\*しないで、いま一度、動詞や副詞や形容詞に戻して考え直してみる必要があるだろう。そしてそのためにも、まずは問いのかたちに、すなわち疑問形に置き戻してみるのが一番だろう。

C 私たちが時間について語るのは、まず何よりも「いつ」としてであろう。あなたはいつ生まれたのか。芝居はいつ始まり、会議はいつ終わるのか。他

方ではしかし、時間を尋ねるにも「いつ」ではなく、「どのくらい」という聞き方もある。駅まで歩いてどのくらいかかるのか。この映画は何分の映画なのか。「いつ」と「どのくらい」というこの二つの尋ね方は、②テンケイ的には「いつからいつまで」というかたちで結びつくことはあっても、ひとまずは別種の質問である。「いつ」とは無関係に「どのくらい」を尋ねることがありうるし、「どのくらい」と関係なく「いつ」を尋ねることができる。「時点」と「期間」、あるいは「時」と「間」は、互いに分ち難く結びついているとしても、少なくとも表立った問いと答えのかたちとしてはひとまず切り離すことができるし、実際に私たちはそうしている。〈 2 〉、私たちはほぼ無差別にどちらをも同じく「時間」として語る。開始時間も所要時間も同様に「時間」という一つの言葉で括られる。約束の時間も睡眠時間も「時間」である。意識的かどうかはともかく、実際には巧みに使い分けていながら、言葉としては同じ一つの「時間」という言葉を使っていること、ここに時間をめぐる問いの一つの難しさがあるように思われる。 D

アリストテレスに『カテゴリー論』という著作がある。「カテゴリー」はギリシア語の「カテゴリーア」(*κατηγορία*)をそのまま英語にした形で「<sup>はんちゅう</sup>範疇」と訳されるが、これも多分に③モれず明治期に作られた翻訳語で、日本語をいくらこねくり回してみてもはじまらない。そしてこれもまた〔中略〕既存の言葉をもとにアリストテレスが独自に練り上げた④ガイネンである。カテゴリーアの動詞の形は「カテゴレイン」で、「何かを何かに帰属させる」ことを意味し、したがってここから裁判用語としては⑤コクソ——罪を誰かに帰属させる——を意味し、また言論においては主語に述語を結びつけることを意味するようになる。広くは主張すること、語ることを意味する言葉として使われていたが、アリストテレスはこれをたんなる述語形態（語りの類型）を超えて存在形態（物事の類型）そのものを表す術語につくりかえた。「ある」ということはさまざまな意味で語られるが、その語られ方には一定のタイプがある。しかもそれは、たんに私たちの語り方、考え方のタイプを表しているだけでなく、そのように語られる事態や出来事の類型をも表している。その類型がカテゴリーである。

『カテゴリー論』では①実体、②量、③質、④関係、⑤場所、⑥時、⑦状態、⑧所持、⑨能動、⑩受動の10個のカテゴリーが挙げられているが、これらのカテ

ゴリーを表す言葉もまた、最初から抽象名詞としてあったわけではなく、私たちの問いのかたちが<sup>⑥</sup>ギョウコしたものにはほかならない。もう少し原語に忠実に訳そうとするなら、それぞれ①「なんであるか」、②「どれだけであるか」、③「[ a ]」、④「何かに対してどうあるか」、⑤「どこにあるか」、⑥「いつであるか」、⑦「[ b ]」、⑧「[ c ]」、⑨「何をしているのか」、⑩「何をされているのか」となる。〔中略〕『カテゴリー論』ではこの列挙のすぐ後に具体例が挙げられていて、①の実体は「人間」「馬」、②の量は「2 ペーキユス」や「3 ペーキユス」で、ペーキユスとは長さの単位で肘から小指の先までの長さを言う。③の質は「白い」とか「文法的知識がある」ということで、④の関係は、「二倍」とか「半分」、⑤の場所は「学校で」とか「市場で」、⑥の時は「昨日」とか「去年」、⑦の状態は「横たわっている」とか「座っている」、⑧の所持は「靴を履いている」とか「<sup>よろい</sup>鎧をつけている」、⑨の能動は「切る」とか「焼く」、⑩の受動は「切られる」「焼かれる」である。

この例からも容易にわかるように、⑥の「時」として挙げられているのはあくまで「いつ?」という問いに対する答えとしての時であって、「どのくらいのあいだ?」という問いへの答えではない。もちろん日本語の「いつ?」がそうであるように、時への問いが期間への問いを含むことはごく自然にありうるだろう。ワールドカップはいつなのかという問いには、たとえば来年であったり来年の6月という答えが返ってくるだろうが、ワールドカップという性質上、当然一定の期間を含意しているから、もっと丁寧に「6月の11日から7月11日まで」という返事が返ってくるかもしれない。とはいえやはり、「いつ」という問いそのものは期間への問いではない。つまり、たとえ答えとして与えられるその「いつ」がどれほどの期間を含んでいようとも、それはまた別の問いへの答えとして、時とは別のカテゴリーに括られなくてはならない。ワールドカップがいつであれ、大会にはおよそ1か月かかる。ひとまずは、来年だろうと6月だろうと関係ない。事情は場所の場合も同じだろう。「ディズニーランドはどこにあるの?」という問いは、ディズニーランドがどのくらいの広さかという問いとはまったく異なるし、「スカイツリーはどこにあるの?」という問いはスカイツリーの高さとは<sup>⑦</sup>ムエンである。もしも期間や広さや高さが聞きたいならば、それは当然「いつ」「どこ」ではなく、「どのくらい?」と問うべきである。とすれば、それはカ

テゴリーで言えば時や場所のカテゴリーではなく「量」のカテゴリーに関わる問いとなる。量のカテゴリーとして挙げられる時間と場所と、固有のカテゴリーとしての「いつ」と「どこ」は、少なくともいったんは明確に区別しておかないと無用の混乱を生んでしまう。

とすれば、アリストテレスが時間を「前と後に関しての運動の数」と定義するときの時間とは、ひとまずは、「いつ」という固有のカテゴリーとしての時間ではなく、「どれだけ」という量のカテゴリーに属するものとしての時間であると見てよい。ただし、あくまでひとまずはあって、後で述べるように、「いつ」抜きには、じつは「どれだけ」を測ることはできないのだが。

問いがまずは「どれだけ」としての時間への問いであるならば、そこにははじめから「測る」ということが織り込まれている。時間とは、測られうるものである。少なくとも、ここで問題となっている時間とは、測られうるものとしての時間である。では、「測る」とはどういうことなのか。いったんアリストテレス<sup>うんぬん</sup>云々は抜きにして、ごく身近なところから考えてみよう。

文字通りの長さ、つまり空間的な長さならば、たとえば指や足の長さをもとに、その長さがいくつぶんあるか数えればいいたろう。広さなら、指や足一本分の長さを一辺とする四角形をもとに、それがいくつぶんあるか数えればいい。<sup>かさ</sup>嵩ならば、コップやバケツ一杯をもとにそれがいくつぶんあるか数えればいい。いずれにせよ単位を決めて、その単位がいくつあるかを数える。単位が何であるかは基本的にどうでもいいことだが、いずれも測られるものと同じ次元のものでなくてはならない。長さは長さで、広さは広さで、嵩は嵩で測られる。長さで広さを、広さで嵩を測ることはできない。四角形の面積は二つの辺の長さを掛けることで測れるではないかと言われるかもしれないが、それは [ d ]、長さで広さを測っているわけではない。一辺の長さを1とする四角形の広さをひとまず広さ1と決めて、その広さ1の四角形が問題の四角形のなかにいくつ入るかを数えているにすぎない。

では、時間はどうか。時間にしても、やはり時間によって測るしかないだろう。基本となる時間を1として、その時間がいくつぶんあるかを数える。それが時間の長さだろう。時間は時間によってしか測れない。とはいえ、たんに時間だけを測るということもありえない。時間は何であれ何かの動きの時間でしか

ない。空間もそうだろう。長さによせよ広さによせよ嵩によせよ、それはかならずや何かの長さであり広さであり嵩である。時間もまた何かの時間であり、何ものの長さでもないような長さ自体があるのではないように、何ものの時間でもないような時間それ自体があるわけではない。「長さを測る」によせよ「時間を測る」によせよ、それはいわば省略した言い方で、実際にはかならず何かの長さ、何かの時間を測っている。何かの長さを別の何かの長さをもとに測るのであり、時間もまた、何かの時間を別の何かの時間をもとに測るしかない。たとえば歩幅を単位としてそれがいくつあるかを数えることで道の長さを測るように、時間もまた、たとえば脈動を単位としてそれがいくつあるか数えることでどのくらいかかったかを測る。〔中略〕その動きは繰り返されるもの、繰り返すことができるものでなければ困る。一度限りの出来事は数えようがない。〈 3 〉、数えるとは繰り返すことであり、数とは繰り返された回数である。脈拍でも呼吸でもいい。適当な間をおいて指を折るのもいい。何であれ、とにかく繰り返される何かの動きによって、あるいは何かの動きを繰り返すことによって、問題となっている何かの動きの長さを測る。もちろん、静止にも時間はあるだろう。しかしすべてが静止したとしよう。それは、何もなかった1億年のようなもので、じつはそこに時間はない。静止もまた何かの静止であり、その時間は何かの動きによって測られるしかない。

長さによって長さを測り、時間によって時間を、運動によって運動を測る。単位となる長さや運動の端を、測りたい長さや運動の端にピタリと合わせて、そしてそれが向こう端までいくつ繰り返されるかを数える。長さによせよ時間によせよ、測るとは端から端を測ることである。もちろん、途中の長さだけを測ることもあるが、だとすれば、その途中なるものの端から端を測るのであつて、端から端を測ることに変わりはない。言い換えれば、長さを測るとは「ここ」から「ここ」までの長さを測ることである。

言い方としては「ここ」から「そこ」、あるいは、「そこ」から「そこ」を測ると言ったりするが、「ここ」から「そこ」までを測るなら、結局は、その「そこ」にまで行って、その「そこ」を「ここ」にしなければ測ることはできないだろう。「そこ」から「そこ」を測るにしても、実際に測るときには一方の「そこ」へ行って、「そこ」をいったんは「ここ」として押さえ、次いでもう一方の「そ

こ」へ行き、「そこ」を「ここ」にするしかない。ほんの10センチ、いや1ミリでさえそうだろう。かならずや一方をまず「ここ」として手と目で押さえたうえで、次いでもう一方の端を「ここ」とする。たとえ定規をあてがう手はそのままで、「ここ」と「そこ」を同時に手で押さえることができたとしても、<sup>まなご</sup>眼差しはかならず一方から他方へと動いている。

とすれば、ほんとうはどんな長さも時間なしには測れない。ただ、長さを測るときは時間を関係ないものとして無視しているにすぎない。測るということが数えることであるならば、そして数えることが時間抜きにはありえないとすれば、長さの測定もまた、時間によって、それゆえ運動によって支えられている。そしてその時間の長さ、運動の数もまた、もちろん端から端、「今」から「今」までしか測れない。どこであれ、定規の目盛りをあてがうのが目の前の「ここ」でしかないのと同じように、どんな時間を測るのであれ、ストップウォッチを押すのはいつも「今」でしかない。「さっき」押したのも、それはその「さっき」が「今」だったからであり、これから押そうと待ち受けているその「時」は、その時がまさに「今」になるときでしかない。押すときは、いつだって「いまだ！」と押すのだ。

そうだとすれば、f アウグスティヌスの心配は杞憂<sup>きゆう</sup>にすぎない。

過ぎ去った時間はもはやないものであり、来るべき時間はまだないものですから、だれが測ることができるでしょうか。もしできるというならば、その人は「ないものを測ることができる」と、あえていわなければならないでしょう。(アウグスティヌス『告白』より)

もうない過去やまだない未来にどうやって物差しをあてがえばよいのか。だが、そんな心配はいらない。長さで考えてみよう。一方の端がもはや見えなくなったからといって長さを測ることができなくなるわけではない。グラウンドの距離を測るなら、一方の端に行ってメジャーの端を固定して、そこからずっと巻尺を延ばしながら反対側まで行く。向こうの端はもう見えないが、長さを測ることはできる。目の前の目盛りを見ればそれでいい。簡単なことではないか。

それは違う、と言われるだろうか。〈 4 〉見えなくとも測ることはできる。

しかし、ただ見えないだけで、向こうの端がなくなったわけではない。見えないけれど、巻尺の端はいまもなお向こうの端に固定されているはずだ。そうでなければ、とても正確な計測と言ひ難い。地面も巻尺の端も、見えないけれどたしかにある。だからこそ測れるのであって、時間のようにもはやないものを測っているのでない、と。向こう端とこちら端、その両端があるのでなければ、いったいどうやって測るといふのか。

それならローラーメジャーをもってこよう。⑧ツエの先に車輪のようなものがついていて、その車輪の回転によって辿<sup>たど</sup>った距離を測る器具である。ローラーメジャーはただくるくると回り続けながら、私の足下を私と一緒についてくる。メジャーの端が出発点に残るわけではない。ただこちら端にだけあればいい。いまここにあるローラーメジャーのカウンターを見るだけでいい。向こう端など関係ないではないか。

いや、しかし、となお反論が聞こえてきそう。関係は大いにある。向こう端はある。なくては困る。メジャーがもはやそこになくとも、地面までなくなったわけではないだろう。メジャーはここにしかなくても、測られる地面はいまもちゃんとあそこにあるし、あそこからここまでずっと続いている。過ぎ去った時間はもうないが、通りすぎた地面はいまもずっとある。とすれば、ここでもやはり、ないものを測っているのではない。そうではないか。

だったら、しょうがない。スーパーマリオか何かのように、道を進むそばから足元の地面が⑨クズれ落ちていくとしてみよう。道路はもうないが、もうない道路の長さはちゃんと測れている。手にしたローラーメジャーさえ残り続けるなら、もはやない道路の長さもきちんと正確に測れているはずだ。とすれば、長さにしても、その端がいま現にあるかどうかは関係ない。大切なのは道路とメジャーが一点たりとも離れずに、ピタリと重なり続けていることだけである。計測の間中、端から端まで全部が全部ずっと重なり続けている必要はない。「今」「ここ」というその一点で重なり続けられればそれでいい。

[中略]

結局のところ、長さを測るとはその長さを辿る運動の数を測ることであるだろう。道の長さを測るとは、その道を私が歩いた距離、私の運動の距離を測ることであり、私の歩数、私が交互に繰り出す足の動きを数えることにほかならない。



ローラーメジャーはその代理にすぎず、ほんの1ミリを測るときの定規ですら、指先のかすかな動き、あるかなきかの視線の動き、数えるという心の動きの代理でしかない。

「ここ」から「ここ」、「今」から「今」を測る。それしか測れない。もちろん、さっきの「ここ」はもう「ここ」ではないし、さっきの「今」は「今」ではないだろう。二つの「ここ」が同じ場所でないように、二つの「今」も同じ時ではない。一方はピストルの合図が鳴った「今」であり、他方の「今」はランナーがテープを切った「今」である。だがどちらもやはり「今」であり、「今」でなければストップウォッチの押しようがない。二つの「ここ」が同じく「ここ」と言われるのは、それが私の現にいる場所だからであり、二つの「ここ」が異なる場所であるのは、私が動いたからである。同様に、二つの「今」が同じく「今」と言われるのは、それが私の現にいる時であり、その「今」が異なるのは、私が動いたから、私というものがそうした動き、すなわち魂だからである。

「いつ」が「どれほど」という量のカテゴリーとは区別される固有のカテゴリーであったことを思い出しておこう。時間が「どれほど」のカテゴリーに属するなら、「今」は時間ではない。線の端としての点が線ではなく、また線の部分でもないように、「今」もまた時間ではなく時間の部分ですらない。しかしまた、端なしには長さがないように、「今」なしには時間もない。「いつ」なくして「どれほど」は測りえない。そしてまた、どんな「いつ」も「今」抜きにはありえないとすれば、「今」なしには時間はない。そして「今」は「私」なしにはない。「私」という言い方を、アリストテレスはしないのだが。

時間とは「前と後に関する運動の数」であった。とすれば、数える者がいなかぎり時間もないだろうとアリストテレスは言う。

もし魂が存在しないとしたら、果たして時間は存在するのだろうか、しないのだろうか、これが疑問とされよう。なぜなら、数える者の存在することが不可能である場合には、数えられうる何ものかの存在することも不可能であるから、したがって明らかに、数もまた存在することが不可能であろう。  
(アリストテレス『自然学』より)

魂とは、肉体と離れてそれ自体で存続しうるような何かではない。たんに、つねに肉体と結びついて、肉体とともにあるというのでもない。魂とは肉体がまさに肉体であるということ、つまり、生命なき物体ではなく生きた肉体であるというそのことであって、〔中略〕生命をもつことももたないこともできる自然的物体がまずあり、そこにどこからか魂なるものが吹き込まれてくるというのではない。

〔中略〕

それでは、自然的物体が魂をもつということ、生きているとはどういうことなのか。

「生きていること」は多くの意味で言われるから、たとえそれらの意味にあたるものが何かただ一つあるだけでも、そのものは「生きている」と言う。そしてそれらの意味にあたるものというのは、たとえば、理性、感覚、場所による運動と静止、さらに栄養にもとづく運動、すなわち衰弱と成長などである。(アリストテレス『靈魂論』より)

食べること、感ずること、動くこと、考えること、全部が全部そなわっている必要はない。どれか一つでもあればいいと言うが、その一つとは間違いなく食べること、栄養をとることである。そして「栄養にもとづく運動」とは、たんに獲物を口に入れたり噛み砕いたりする動作だけでなく、「衰弱と成長」というプロセス全体のことであるのだから、たとえ一瞬でもその運動が止まることは、とりもなおさず死を意味するだろう。とすれば、魂が動くとか動かすという言い方にはおそらく<sup>⑩</sup>ゴヘイがある。それ自体として動くことも動かないこともできる魂なるものがあって、それが動いたり動かしたりする、というふうにも聞こえてしまう。〈 5 〉、魂があるとは生きているということであり、生きているということは動いているということにほかならない。そして、その動いている「時」は「今」しかない。あるいはむしろ、動いている時を今と呼ぶと言ったほうがいいだろう。動きは今においてしかない。魂があること、生きていること、動いていることは、今においてあるということ、今があるということであり、今がなければ生はない。死とは今の喪失である。

[中略]

今はまた時間をつなぐものでもある。今は時間を区切るだけでなく、同時にまた「過ぎ去った時と来らんとする時とを連続させる」(アリストテレス『自然学』より)。線上の一点が一つでありながら、同時に一方では右へ延びていく線分の左端であり、他方では左へ延びていく線分の右端であるように、今もまた一つでありながら、同時にまた過去の終わりと未来の始まりという二つの顔をもち、過去と未来をつなぐ。そして脈であれ秒針であれ、その運動の数によってランナーの動きを測ることができるのは、それを測る魂自身がそれらの運動にぴたりと寄り添いつつ動いていくからにはほかならない。運動は運動によってしか測れない。どんな運動をどんな運動で測るのであれ、その根底には魂という運動がなくてはならないだろう。

[中略]

たとえ運動があっても、それが運動として気づかれなければそこに時間はない。いやむしろ、気づきという動きがなければ、と言うべきだろうか。動きでないような気づきはない。したがって、運動なくして時間はないと言われるときのその運動とは、つまるところ魂の動きであり、それがたんなる運動でなくまさに魂の運動、魂という運動であるのは、魂が自分自身の動きに気づいている動きだからにはほかならない。

もちろん、そうした気づきが明確な自己意識であるとはかぎらないし、その必要もないだろう。いま私の目の前で猫が眠っているが、その場所が「ここ」であるのは、唯一その当の猫にとってだけである。意識的かどうかはともかく、自身の場所を他のあらゆる場所と区別して、他のあらゆる「そこ」に対する「ここ」として捉えることができないようなものは、もはや生きているとは言えないだろう。「ここ」がわからなければ「そこ」はわからないし、いったいどうやって「そこ」にいる獲物に飛びかかれようか。いったいどうやって「そこ」に現れた敵から逃れえようか。「ここ」を「E」の場所として、「そこ」を「F」に至るべき場所として、したがって、その「G」が「H」となったあかつきには、「そこ」が「ここ」となるべきような場所として捉えることなしに運動はない。「そこ」とは、私が「I」いないところ、私が「J」いないところであり、これから向かうべきところ、これまでいたと

ころである。

(富松保文『アリストテレス はじめての形而上学』NHK出版、2015年より。小見出しを省略するなど、問題作成上の都合で一部改変)

(注) 実体化 … 観念のなかにあるものや抽象的なものをあたかも現実中存在するもののように考えてしまうこと。

問1 下線部①～⑩のカタカナをそれぞれ漢字にしてください。

問2 空欄〈 1 〉～〈 5 〉には、次の語のうち、いずれかが入る。それぞれの空欄について、最も適当なものを一つずつ選び、ア～オの記号で答えなさい。重複はないものとする。

- ア) 逆に言えば
- イ) そうだとすれば
- ウ) そうではなく
- エ) なるほど
- オ) にもかかわらず

問3 次の一文が入るとしたら、空欄 

A
---

 ～ 

D
---

 のどこが最も適当か。A～Dの記号で答えなさい。

普段の暮らしのなかで「時間とは何か」という問いが発せられることはまずない。

問4 空欄 [ a ] ~ [ c ] にそれぞれ入る語句として最も適当なものを、以下のうちから一つずつ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア) だれの持ち物であるか
- イ) どういう姿勢であるか
- ウ) どの種類に属しているか
- エ) どのようであるか
- オ) 何を身につけているか

問5 空欄 [ d ] に入る表現として最も適当なものを、以下のうちから一つ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア) あくまで計算の仕方にすぎず
- イ) 偶然に計算結果が一致するだけで
- ウ) 長方形だけの例外で
- エ) 数学的には正しくても哲学的には誤りであり
- オ) 長さとは同じ次元だからであり

問6 下線部 e 「何もなかった1億年」とはどういう意味か。その説明として最も適当なものを、以下のうちから一つ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア) 動きと静止の区別がつけられない1億年
- イ) 化石などの遺物がまったく残っていない1億年
- ウ) 全てのものの動きが完全に止まった1億年
- エ) 大事件が一度も起こらなかった1億年
- オ) 物質が何も存在しないまま時間だけが経過した1億年

問7 下線部 f 「アウグスティヌスの心配は杞憂にすぎない」のはなぜか。その説明として最も適当なものを、以下のうちから一つ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア) 「量」のカテゴリーでは答えられなくても「時間」のカテゴリーで答えられれば十分だから。
- イ) 計測を終えたときにはすでに存在しない道路ならば、その長さをたとえ正確に測れたとしても何の意味もないから。
- ウ) 現代には、アウグスティヌスの時代には存在しなかったローラーメジャーやストップウォッチが存在するから。
- エ) 「今」が連続していれば「もはやないもの」・「まだないもの」でも測れるから。
- オ) アウグスティヌスの疑問は当然であって、だれも異議を唱えないから。

問8 空欄  ～  にそれぞれ入る語を以下のうちから選ぶ（同じ語を二度以上使ってもよい）と、一つだけ一度も用いない語がある。それはどれか。一つ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア) いつも
- イ) 今
- ウ) まだ
- エ) もう
- オ) やがて

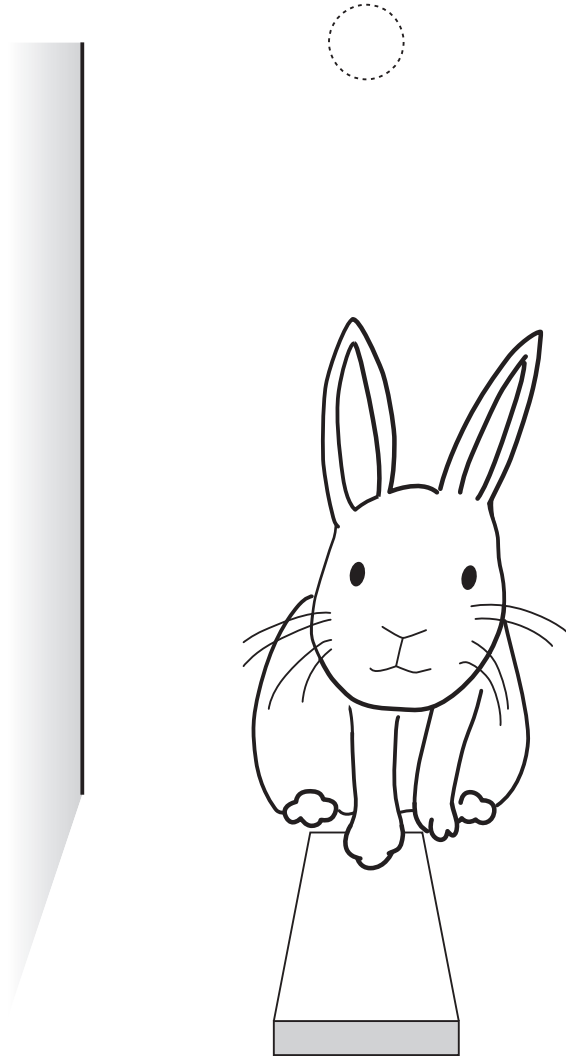
問9 問題文の趣旨と適合しないものを、以下のうちから一つ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア) アリストテレスのカテゴリーの区分に従えば、「いつ？」という問いへの答えと「どのくらいのあいだ？」という問いへの答えは異なるカテゴリーに属する。
- イ) 長さを測ることは数えることであり、数えることは時間なしには行うことができない。
- ウ) 「今」は「量」のカテゴリーの時間ではないが、「今」なしに時間を測ることはできない。
- エ) 長さの計測とは異なり、時間はなくならないので常に正確に測れる。
- オ) 魂が自分自身の動きに気づいている動きがなければ時間はない。

問10 問題文の題名として最も適当なものを、以下のうちから一つ選び、ア～オの記号で答えなさい。

- ア) アリストテレスとアウグスティヌス
- イ) カテゴリーとしての時間
- ウ) 「生きていること」の多くの意味
- エ) 時間と魂
- オ) 長さの測り方と時間の測り方

問題2 下の絵を見て、あなた自身が考えたことを、600字以上1000字以内で自由に論じなさい。段落のために生じる余白も字数に数えることとする。





## 2023 年度成蹊大学 AO マルデス入試法学部討論力審査テーマ

「エビやカニを生きたまま熱湯に入れて調理することは、法律で禁じられるべきか？」

2022 年 4 月、イギリス議会は新しい動物福祉法 (Animal Welfare (Sentience) Act 2022) を制定し、法律上保護される「動物」の定義に頭足類(イカ、タコなど)と十脚目(エビ、カニなど)を追加した。同国の従来動物福祉法は脊椎動物のみを保護対象としていたが、頭足類や十脚目も痛みを感じることを示す確かな科学的根拠があるとの研究者らの報告を受けて、保護される「動物」の範囲を拡大したのである。イギリスでは、今後、これらの動物に苦痛を与える調理法や実験が禁じられる可能性がある。

現在、日本を含む多くの国々では、エビやカニが生きたまま店頭やネット上で販売されている。エビやカニを生きたまま熱湯に入れてゆでる調理法は、これまで特に残酷なものとは考えられてこなかったように思われる。しかし、たとえば、スイスでは、ロブスターを生きたまま熱湯に入れることはすでに禁じられている。日本も、エビやカニを生きたまま熱湯に入れて調理することを禁止する(気絶させるか即死させた後で調理しなければならないこととする)べきだろうか。

エビやカニを生きたまま熱湯に入れて調理することが禁じられるべきでないとすれば、単に「今まで禁じられていなかったから」「自分の所有物だから」「いずれにしても食べるから」というだけでなく、なぜ禁じられるべきでないのかを正面から議論する必要がある。日本や諸外国の法的・政治的状況について資料を収集・分析した上で、自らの意見を示されたい。